

平家物語

長門平

二十止

リ 5
200 2
20止





平家物語卷第二十

主馬八郎左衛門盛久事

法正寺一橋大夫知忠合殿事

小左衛門丹後侍從事

同左衛門宗實事

悪七郎景清事

文學流罪事

灌頂卷事

越中次郎景盛次事

六代御前被切事

本朝桐地
書之庫

廣辻氏
藏書記

六代元寇の御事
源氏家系御事

源氏家系御事

源氏家系御事

源氏家系御事

源氏家系御事

源氏家系御事

源氏家系御事

源氏家系御事

平家物語巻第二十

源氏家系御事

三馬八郎左門尉盛久事

平家家の侍共被テ漏テ無事斐人宇生たるもの
中より頭を以テ源氏にをなく侍りり重代お
傳久成心より源氏に者七八人より源氏に心を
化ぬ一一家より人に三三人りて世より源氏に
是れぬ者共山形に交りし加しおにたつたれり
おふもて日本國源氏殿の世よりありて大家の主
とて世よりおをせりし源氏の源氏に
はておにりし源氏に官位するものありてはハ一
として京都の片目より人の怨より書し御みよ

己本等に祈を信心のやうにとをせらるゝつる日訪宣
かりぬをれ西國乃戰場と軍破て人、海より去
し時ふくく危のみふ川も有りたり城ハ人今口か
く此免にたゆんししれをとりぬ事のかくおの
ひつけておひきりし朝夕露に、乃ちを、けりぬり
取るをくまふれと濃倉に、下流しぬ橋、亦三
景時、何れ作ぬ此作を兼りて盛久を、心中の、西
を尋りし、ぬに、子神を、正久盛久、宗家、宗代、お
此宗人、宗家、宗徳、けり、此か、り、宗、斬、刑、た、橋、ぬ、
くとして、土、三、宗、宗、を、た、作、て、そ、を、削、ら、る、危、し、と

文治二の廿八日に盛久を由井の溪に引すして盛久
西に向て倉佛の屋敷に斗かけり、思平の南に向て
又倉佛二十十斗かけり、宗遠太刀をぬれ、頭を
く、其、太刀、中、の、お、を、り、ぬ、又、く、川、太、刀、も、免、ぬ、れ、お、
化に、り、思、平、の、思、を、お、す、た、一、斗、士、の、す、を、所、か、先
二斗、り、盛、久、の、身、に、お、お、て、たり、と、お、み、に、名、宗、を、使
者、を、二、て、木、の、由、を、無、齋、佐、成、に、か、た、又、宗、何、佐、成、の
宗、家、の、夢、に、黒、土、源、の、衣、れ、り、老、僧、一、人、出、来、り
て、盛、久、斬、首、の、罪、を、何、て、ら、れ、ぬ、と、お、け、て、宗、免、ぬ、
り、十、ん、宗、家、宗、中、に、誰、人、に、て、お、ん、す、る、お、僧

かけりて我儘の意に似小僧ことやれとや居しとて夢
はめて空閑他ありにゆる不思依の愛をわきまに
と宣けりしに事とあふ家の侍ふ主馬入る成國の
子に主馬八郎左門盛久と中者京都よりかゝれて
いつるを尋とりて唯今宗遠に作て由井の漢小
て首をもひしとてきては此事法有寺の親善の
盛久の身にうもつ勢のむたりけりしやそのをかゝる事
一番の太刀半が三にをれては又次の太刀八目ぬき
おれて盛久の頭はれすいより中ていとして盛久を
召つたり兵衛佐友信帖のそをういやけり
洗ひ口をすれは直垂免しとて盛久に作はるる若
親有りて法有寺の親善のむたりけりしやそのを
何とすや宣也とゆらるに結ある密教のむたりけり
此千石親善を造るしをりて法有寺の親善に
並つ糸をせて内陣の右の殿に立ちりて千日毎の奉
詣をさく應記より一密教の既子八石館の奉詣し
て二石条のをぬきしとて免しとてはれしとて中者兵
衛佐友所帯はふすしとてはるる紀伊國に似し
うとて君の山所は海ありしといと中者たこきりんと
ゆらりて件の所帯はくお違ありるをうすしとあは

此以下みだいでつてよとのことく 羅を捕する事ありしに
終て是を改まるるに龍蹄一足を懸置て此
を白川の北条四郎時政に傳て越前國池田庄を
かりて法住寺仙洞を造進せしむ其奉行せしむ
起りし事ありしを白川の北条四郎時政に傳て
廿八日の事也盛久頭を續のみありし本以を返し
上越前國池田庄を白川の北条四郎時政に傳て
の山利生也盛久頭七月下旬の比改治しし事あり
是つて先づ法住寺に参詣しし本寺を拜せり
て山利生の事ありしを傳へしつて白川の北条四郎時

此師匠は良觀の署梨に申井後にて頭取ら九人と
志ける事をかくし流中に良觀も涙をかくし六月
廿八日午刻の邊の事置しし事ありし本寺に
此の事ありしを白川の北条四郎時政に傳て
つたに板の邊遠此寺を建て傳教乃人を資りたる
此志誠の上代に記たり新造此觀喜の山利益古佛
身に勝れたりと傳へし事ありし事あり

法性寺 一橋大夫知忠合戦事

平家の子孫が去文治二の久に北条四郎時政上洛して
一子二子とすもの事ありし事ありし事ありし事あり

つりて悉くうゝをいしてす権亮三位中納の由六
代由前斗お雄の文学聖人の中何川りうと
詠けられたり一外ハずと一入とや家の子孫か
と思ひ一に新中納知盛の由子三歳にて叙爵
て大夫知忠として紀伊守命為花養守りけるに
ありの由ハたのりたり子は伊賀國或守
にお一けり一子ハおとハりて地守護命ハり
みぬ一け礼と建久七子の秋の坊法性寺の一場
乃邊に志のひてお一けり一をいハりて初めたり
けん一系二位入るたハひて北有此乳父後友命実

基の子に後友たハ基信同子勤命向尉基保十七歳
父子に終て同子十月七ハの中刻斗ハ十ハりて法
性寺一場にを勝向て新中納の子息大夫知忠を
かハめると志ハらに其内に思ひハりたる者ハ十二
人あハり彼所とハりハりて馬通ハを
らハりハと大竹ハて人政をさハりてハり
けれと軍兵馬ハ下て堀にハり揚ハりて三人ハ
お入ハりて伊賀大夫を始ハりて究竟の由の上ハ
去成々ハ大夫命たハりてハりてハりてハりてハり
ていけるおハりてハりて堀をハりてハり

ける軍兵の志いすくふ地集り南水の家をもたむちの
ありたむの世の入樂最事時を極するとしたけ
くありくも力も有りて矢槍つたむれ一人も少う
らうとて自害しそりあて出る者あつてけれ軍
兵のちうに乱入てえれ紀伊守を為記伊
賀太夫の自害したるをいぬのうに引きて為靴
の腹を切てやしたり為靴子兵衛太郎兵衛
兄弟太刀を返して二人う川やんやたり
こふ火をうけたりけるまぬ志いりけんりえりつす
為靴の舎人男一人の腰骨をいせしていすけり
けり其外の老き人みす人みすりたるつとつる系
にちやうんと彼舎人男に返りれと二十系人をと
つらうはみかたみかたとせける哉中兵衛盛次上
徳悪七郎京流り例の生よみれみれあみり
後流九郎基流自害の頭もさうけて一系友
系れり一位入す一系におろしれハ一系友とせり
けり入す夜子息世門幾高路回車し一系を
南へ返り出て實檢せらる為靴の頭知りもの
り在り其外の頭もさうけり伊賀大夫知忠れ
頭一定返らひし見えたるて治アやあそ七系院にす

為靴の舎人男一人の腰骨をいせしていすけり

けり其外の老き人みす人みすりたるつとつる系

にちやうんと彼舎人男に返りれと二十系人をと

つらうはみかたみかたとせける哉中兵衛盛次上

徳悪七郎京流り例の生よみれみれあみり

後流九郎基流自害の頭もさうけて一系友

系れり一位入す一系におろしれハ一系友とせり

けり入す夜子息世門幾高路回車し一系を

南へ返り出て實檢せらる為靴の頭知りもの

り在り其外の頭もさうけり伊賀大夫知忠れ

頭一定返らひし見えたるて治アやあそ七系院にす

あつひのけをむつりてみせらるる七世と申す
控置て西國へ中納言におくして中納言のちいきたるも
死したるも志すべしとおみらるる心よき事
く小指共受（福）なり故中納言のちいきたる所
の阿るは
すも小指とてふみしをわつしむらんわりの

小木云殿御子丹後侍従事

小妻を以て小息六人おこしけりしかして後
れあひて末の子は丹後侍従忠房とておんしむる
岐の國八島の戰場をたふすり志すりしはるる
國の住人湯浅權守宗重ゆえ小かたはるる事

家の侍哉中六部少輔盛元忠七少輔景清あん
つれたりしは是を以て和泉紀伊新田大如河内
山城伊賀伊勢八景に隠れ居たりける事家
人より一人二人番集りしはるる事人死りたり
徳倉との事し次しは和波氏部大夫成良は
てせ免らるる成良紀伊國に越て田所郎と云ふ
陣をとりて相たり此上徳所別當堀法眼子息
堀伝父子、傳てせ免らるる湯浅は小倉吉の城を
岡村岩原山岩村比城とて三ヶ所あり彼城の内岩村
の城小倉原人だて居るこの外湯浅の家は常

敷を志し、中へ湯治。得神所、尾後、本吉、
尾着、小友、浪、此十部、其養子、泉源、を源三
兄、才、岩、夜、三、部、家、受、ふ、ん、と、云、一、人、當、千、の、兵、共
指、罷、り、た、り、間、た、や、す、く、奏、お、し、あ、し、一、増、増、た
此、み、き、の、た、り、侍、次、木、部、た、り、先、と、し、一、老、人、も、勝
れ、て、進、出、美、た、ら、ひ、け、る、を、尾、着、大、中、さ、し、此、地、五、東
つ、つ、を、右、中、を、引、て、は、あ、り、小、中、を、為、尉、の、甲、の、を、あ、つ
け、の、板、を、出、を、籠、て、村、通、し、た、り、果、を、寄、り、の、兵、共
二、つ、す、み、た、し、一、す、也、る、三、月、の、間、八、度、の、敵、の、懸、地
侍、節、も、さ、り、多、く、ふ、れ、た、り、は、信、濃、倉、倉、あ、り、と、け

す、今、は、信、兵、の、力、つ、た、り、は、増、中、に、て、い、ろ、や、尾
ろ、う、た、り、國、を、い、ま、う、國、を、さ、せ、り、て、後、着、兵、を、り、て
せ、免、り、免、り、と、持、中、け、ら、信、濃、倉、倉、あ、り、け、り、信、兵
乃、と、あ、り、い、ろ、た、り、あ、り、始、終、い、つ、て、あ、り、て、あ、り
あ、り、地、を、り、け、ら、信、濃、國、を、り、と、り、一、れ、共、等、山、海
を、よ、く、守、護、し、て、山、城、海、城、を、り、い、つ、て、五、を、守
獲、七、ら、山、徒、兵、糧、を、り、一、人、二、人、あ、り、ん、糧、ふ、人、り、
あ、り、し、一、れ、共、小、吉、夜、君、を、り、所、人、り、ん、を、い、ろ、い、め
中、つ、一、た、て、あ、り、い、ろ、ん、人、を、り、誅、す、一、一、朝、朝、
治、の、礼、小、流、罪、に、定、り、た、洲、一、つ、池、尾、山、前、の、使、り、て

小書夜太政入道夜に伺ひ口く能権に申されたり
りしに上りて流罪に定るありし小書夜のみ忠
也申されける此上高尾文学上人をりて由湯
河権中家を誘つゆられける小書夜を白
ひせりて合戦を設事日本國を欲ふ志ありはと
云一己二心未だ出でてあり其始終はいつてのあら
る事と思ひて流倉友のゆふ所をりし宗
重侍従友にりける小書夜は宗重の侍
友君達陪人にしんをとりし小書夜を
ひしをりし宗重は宗重にりし小書夜を
ひしをりし宗重は宗重にりし小書夜を

此たる也始終は宗重より宗重にりし小書夜を
宗重にりし小書夜を宗重にりし小書夜を
事なれりし小書夜を宗重にりし小書夜を
此は九部大夫判官京都の守護にておはし
けりし判官の侍丹後侍従を送りし判官
小書夜を宗重にりし小書夜を宗重にりし
小書夜を宗重にりし小書夜を宗重にりし
に入ぬる上判官の侍にりし小書夜を宗重
にりし小書夜を宗重にりし小書夜を宗重

友實に「君はいま何人と云ひかけり教へ入るらん
を江國勢田にて切きりいふ事世やと人い
ふにかけり

同土佐守宗實事

小松友の末の孫子土佐守宗實とかけり頭をわら
し東大寺春葉坊の上人の神にたをりて我ハ
故小松大匠重盛の子也生心三才して大炊由
門左大將宗の孫離て父母にりせん我實
子の心とくにありしにありしと云ふ矢の向ふ
たろりんもと志すんは「宗家」を降

に「お具」つたりたお具事かん長色川「宗家」
乃子孫少ありぬを「宗」の事か「宗」氣化「宗」を
し「宗」ありしにありしつれも「宗」て身「宗」
「宗」す「宗」も「宗」化「宗」を「宗」たり
「宗」費「宗」れ「宗」斗「宗」と「宗」の「宗」十八
に「宗」成「宗」け「宗」川「宗」泥「宗」け「宗」入「宗」上人
「宗」を「宗」れ「宗」て「宗」は「宗」是に「宗」も「宗」お「宗」ま
と「宗」ひて「宗」大寺「宗」會「宗」し「宗」に「宗」十「宗」りて「宗」
此「宗」を「宗」會「宗」し「宗」二「宗」は「宗」此「宗」を「宗」し「宗」の
お「宗」罪「宗」は「宗」人「宗」に「宗」ぬ「宗」出家「宗」た「宗」おハ

すべしを左様して夫にを戻すとかされ多りけり
上人の先あるす收て覺りたりは河内高野の
蓮華谷と云氣に住して生蓮華と云や
其の事いって花桶なりと云ふと云ふ土佐入道生
蓮坊をよと云ふ一と云ふをまじりて京を出る
りる日飲食を断て十日と云ふに足柄の山を越
て美本と云ふ氣にて終ふ覺るの如衣也
事なり也

忠七景法事

上総忠七景法事
供養の日をうけて建久七年三月七日にて
上湯の事をいふ終ふなり

越中次郎盛次事

越中次郎盛次を初り守備志とて但馬國小
倉にて系比の權守と云ふ本に隠居た御方人
是を志す始て鹿につくられて馬をせりたり馬
をりよりいり馬洗ふ出つ、馬に乗て池たり
なり、物射は福しなりおんとしけり
廣々娘のむけるつらつらして今氣のよきつら
る、おしものいとす物よとてきりける

程小女たりたりけん彼娘の川の川までよぶと思て
ういりり誰やくろをさす風情を陽化かの
てりり盛次く此の度、高へは行りては法事
たりける女の許へ我通ひけるある夜の女扱りの
く小女をんぞ我々程小女をうのよりをわすれた戸
をて情をのけぬと殿をおろふ思をうんと程ん
出強小中死に我ハ但馬の國きいの境たる處とて
若のりしに何のちかかゝ人た披露はかと程か
たりける湯入倉屋の越中次郎兵衛盛次をおろの
てりすと糸りある人者をも節貴を被り由湯
倉屋の披露のりていつくは隠れ居たりんか
てて家節貴もちと我中盛次をもて披露す
かところをけて程たる女のうてはつては我次
節貴の氣をわたりたれとたりけれ、冒けてた
能く尋まいて湯倉屋小此うを中屋つて氣はの
権入道意に候てかゝめてまいらん一なり
是久小の法法候にけりる處お言大まに在来し
たりけり我みらりん妹年朝倉大夫高信ありひ
に家人字小越中次郎兵衛盛次く先てまいつれは

いふ事して小の事化と我中たりけるたやすくもあへく
かよりん温室にてわづむくも温室小の事
てしつゝの七八人用意しはり盛次温室小を
りいふ小腰刀に帯をすきて温室のころにかけし
置ける是用心の爲也盛次温室小をりたのちの七八
人の若かり免んとん盛次志りあるとしてあはれみお
と一度りかめりるすしに帯とまて温室のころを
走り出たりにけりかされり志つるあはれに権取大
事にちりる又かきりたれしにわづは見えある
このおれはつゝもあんならるる人たれはつゝは志

繩をたて志をくすしとせして帯をすて志はられけ
り氣比権取盛次を徳念よのへきりたたりたは
盛次を三玉といふあんならるる侍かゝる平家の
一門よりあつるふあはれはのへにて平家のひと
と一所よあ死をりかきりたれしとわづはれたは
平家の君をすせせらく出たる事ありあそわ初ひ
たてぬよれ主をの執りつとてあはれりあてはつとや
ける物あんならるる九命とつたれらあそわ初はれは
する事いれ若き何としてをけをいしあそり別あは
きりたりけりあはれつゝあはれするはあはれ

其人小志を以てすといふに、さういふに、たゞ此の
くつおのけうを、乞向しといふ、素に入事し、い
より、同を、いといふ、今、て、を、い、さういふ、
う、か、い、す、い、ま、い、て、但、系、ら、せ、ん、と、い、ふ、
の、か、い、ん、教、を、落、し、置、に、す、い、て、ほ、い、心、を、い、
て、在、所、を、い、志、し、せ、い、い、の、ハ、叔、少、を、い、
と、腰、刀、の、い、い、た、い、征、夫、の、所、に、い、い、い、い、
倉、庫、の、い、た、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
と、連、つ、れ、て、い、い、い、い、い、い、い、い、
中、け、る、徳、倉、有、い、い、い、い、い、い、い、い、
と、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
二、の、者、や、虎、を、い、い、い、い、い、い、い、
う、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

是といふいふいけは、其平家の侍の中に、是、一
二の者や、虎を、い、い、い、い、い、い、い、
う、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

文学流罪并六代御前被切事

平家の子孫と云侍と云ふ、此、い、い、い、い、い、
五、五、子、と、い、い、い、い、い、い、い、
孫、叛、を、い、い、い、い、い、い、い、
小、吉、内、大、片、夜、子、孫、権、亮、三、位、中、納、推、盛、の、子、息、六、
代、御、前、平、家、の、嫡、子、也、小、吉、内、大、片、夜、世、の、中、傾、う、ん、す、
る、事、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

をうしむいさふ父三位中納言盛平の宮中に
讃岐の矢島を乃れ出のいて高麗系りて出家
しむして登る態地に在りまは那智の奥ふて力
を授けしむる人の心子也頭を替り多し心のため
此事より悟し初めれとくく一をみやとひし
中は此徳倉を免ふり其故ハ文学上人のゆ
んたてと叔父をゆめと思たけらかくは徳倉
後日來乃り一に悟りけらるるたは此後
さ一也文学上人元々思しれ心り地なら物と内
こいりけらるる出る今をゆめ乃みゆふ入出多て

世の世政を志せし免さす九条友房の後
御局のちにて河化人の態歎み免さす故
高倉院を其比二名とや二宮出此文学文にお
こたせせらハ正理をゆめとておはしを執りし
位はけしき勢て世の政をおこるこせ免らせん
とんこひけ化世原二位昇日体をかかす大帥を
を經右大納言成多ひ少り右大納言をさ一
かたりハふかきりけらる正治元年正月十日右
大将に一舟三にてうあつひぬ文学上人の古
十人のかうしけれと文学上人忽ち勅封を蒙

化子何れ草ありていふくこのさちりあつてり
浦島の子の地志ていとふあしく我思く先ず
岡母たの政所と拙をれりし北所あともかたを
はて今いふ夢あつたれれりや西八条の石
宿所り境失してよみかたかくおほいめけけ
東山の麓吉田のほとりある所といふ夢あつ申ゆ
法橋慶恵とやける奈良法師の席ありりす
何してよひあしく成る北の斬ふ若者志のよ
生志ありいと云けり至とこ花いりよよ
よめりしとた乃世人もる月いよよ

化とあつてあつたなもあつて度には草あつて
して荆棘みりをととつて後たつて後たつた
姑蘇墓の跡清くあつたの程をかひきり
ひとくもくも三列してあつたけあつた
ともいふあつたつたあつたあつたあつた
し今又あつたあつたあつたあつたあつた
絶てあつたあつたあつたあつたあつた
えうのあつたあつたあつたあつたあつた
徳しくも思く先ずけり

蒼波路遠寄思於西海千里之雲

白露苦深落淚於東山一亭之月
天上の月暮りかるとる百志了れて衣也日月朝日は
くしおぬす夢多し四歳廿九にりある勢多し芙蓉
乃半くつたせぬ物思ひにおと移つて凡くや
せぬ事せめて世の物も何んかある勢多しと
わらほ世にけ人にならうすうのり勢多しと
たあは法むすのん身と身ていからう世
にと今とあるいせんかハ翠年集に歌あり
かく思ふつ、いさぬをうと勢多し一由戒仰にハ長
東寺乃西上人矣わら勢多しけり此布施ハ先帝

乃以直岳をかくしそりいさ勢多し上人と徳折ある
しと

流轉三界中 忽愛不能断
奇思入無為 真實觀思者

此類者並三寶知見あるしすんらんしとをて中
は勢多し墨土澤の衣の社を志ならける中にハ衣
乃まありしといはの初道たてやう例たりしハ衣
それハ川で香りあつしと此ホリや斜しと者
くすいなるいんせやうハ身ををれと勢多しと
言はれ甚さし當りてハ布施にありてハ一平物あり

かりし其の故は言撰の山為にやよきのたれとも
志遠くをうま也五月の題夜も何うしこきさあま
つゝおろばいさしやまを移す時まろし流あけし昔の
重を愛ふたふららんあす宵寝路の灯の影の
あつに志を打暗雨の音早や上陽人の上陽宮まよ
あえうれて幽谷の深しそ白髪人といふれけんか張向
れとさひしさい是にほやまこしとを愛したるはるやうに
らえの何しの植置たる新りうた花橋のむけりう風
あつらん打や一時をうらんおと川に流る女院
山かみしををかきつゝ山観の草廬にかく持十あまあま

時鳥花たち花の香をよめて思やせうの人や恋した
いりさしと流るる人郭るあかりを井か志を流る
習にたちい夢をいたり先共五月のすたありにる
ねり彼所にていっにしそは夢をさるるまれ六月
廿一日に吉田のわたりあふ野はの山所に入勢多と彼所
所と中山花山の法皇は世をわくはあま一時造進
せしれし中山在也あれりすまをさすく成りうら
い所もみれはをれや其跡もかく何れにたり傾ける
愛ふみれりには石すもまを移したる或はたれたや
れつ雨風たやる庵くちか一人跡希ある草むしに

くしてさりよ奥のふらむとれ多んすもせとふすし
くまりはくさ勢多ける提ふ六月廿百を江國にて終り
たふれむて京平をりいさるかと竹うし免しけら水
赤い岩のうちおしもろりて糸にかりれいふく
原千山のおくはもとち勢多を屋と四宮を元子是
ととや人もかくさる(き)使もあうりけれ思百立もか
くて然る世あしく善にりり文治元年八月廿もあり
小なりさやういふふ女席のいりにて大京のおく寂光院
とやける所ふ終志別くまてはつとを尋せりては(と)や
けれと其方依の本意ありと思ふたらせ給大蓮耐

隆席六の北方が御座ふと八沙治し糸多あつたり
忍なら女席車二幅糸多勢多いりは具足女席
たちあしりて了て出は勢多は神母月の始の事
あれと母あしくちりあつたりけれはけしくてお善くち
みりて四方の山色いもあしとせおふとも志く如草村
をもちくけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
とせさの鏡のふえあふく草草の勢多は神志をれて
虫のまやそりあつたりけけ

くつ又善ぬと清のあす也今法にぬしぬるんる
至極甚源乃み床の上たは真理の玉をみるけけ

後夜典辰朝乃侍此夢に共生死の眼も是也眠し
眞に於達れはも完つと云たり聖人なり其も
を以らん其れは不記墨染の衣のうすふゆひ袈裟衣を
赤筆掛うれたり其もかゝるひて護摩の檀にすすほ
り薫くくのあしるゆりまぬかす其れをらまふくあま
めさしけはれれをさすれを以らんあかりし中辰の五輪
の心ふうふをすと云るか——此聖とヤハ是を未成教
の字おとて天下に聞く——賢人也世の中はありはるれ
をさすれよく思て位大中納言正二位を繼てりあかり
せんとしてすし早に成るもありしふ出家して高僧形

川を考へしけるまれのあま——すまに所也とて以す所也
す——ておもしけり女院と陸為命の比のうすもあらむ
して柴の庵すしひつ渡すまらせらりまれとて此の
たのおとくは仙事ともいともみて御者長衣かといゆり
神供の人々其教おもせ——と今ハ渡ワツカふわ人牛也一
人ハ女院の乳母に備具侍者老人少くをおもしす
一人ハ先帝の乳母五条大御守ヨシノ御経令出帳大夫三位の
小味大御守コシ佐友とて本三位中納言平衛治の北吉也一
人ハ平大御守時忠令言事也の出帳令一人ハ大官大
政大臣伊道公原鳥羽中御守伊實令出帳一人

少ゆき入る信西子并入道定憲初岐の内侍とやける
人也各支壽の契をうまし父母の所に絶すして終
らる吉田にと慈あつ旅もたつ人の行所よに於て
りおのつる玉章のつてとつとに今うかむ其ののる
とふ人さつれありせんふまさらと掃きて候りもあつ
思ふらんらて神無月の中のみ日の夕暮にあつる古き
をふたれさるの志花つてもあつ人にやとて急まみの
うらゆきと行をあつてけつていらんすれと人あつて
麻井一つれあまやと法礼てむくの谷へ入にまつれを
いらん

岩根やみ誰とともんあつるまのせりく麻のほろせり
秋の形たけぬれとあつる空には成る岩窟をくら谷の
れされきたあつるせん四市の山道をみるはせみれ
白たつに障りふくみ山の木のほいしに木の月をさ
中あつる度とら白雲横れき初やみのる人あつる
池の白あつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
乃けつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
れしあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる
草の庵と民畑村とをくしつていたつるあつるあつるあつる
硬花深しとて己様の言付はく麻のをくあつるあつるあつる

あつぬきのまのみるまきこり田面の原りおと川化て
疾の凡穴ぢもはたまやく風りみりみて谷は
此岩に苔の母を替り

青苔似衣結岸上白雲似帯廻山腰
水のまむかしく苔の浪小唯して行人の衣志を
るりしり理也

材幽翠半似花萬のしり替お小篠のあみ尾をたて
即来迎念のしりへ乃忘にとすも心慮を掛られたり
山を凍たにうけたらたら掛樋の水もつらいつて人目
り草も枯もつて、庭の物けわのまねたててや後まきあるも

あつりく極の花うら花うらみう川うら加た何れ也
道場は志のうら心すふれ極也座禪とけりて
楹上に苔母をり雨凡たやうぬ極ありたより
物とそと巴渡れ様の一きけいり川りけやんたの截の
おしおとこの音候からてとすまたのうつろ何をつら
くも人すれり所也

去るら山家乃景もこり極ありいつて炭谷の煙
虎のやふに夜り谷を立出るまきのあふのほらちあぬ
て新物の梅もかろの極らちあつを屏障もよに
もいふもせり一極もあつりめされけせらら下も

乃重よきものも故令つてせすなりしと平月し三三
月の昔の故にありぬれは山本の其指とよみし
しるすは花を歌て白雲がらぬ山やふきいとしり
なく物事ありし成程の字お入さしかりし思は
れけれも世の中を指しゆく又いふありたる石をわや
たんとすすと思をれつる志をいふさとしりし
て高懸乃しすれたり是礼門院とよみ高
倉七天皇は依大政大元正盛入道の由娘安徳天
皇の川母候也高倉天皇とよみ後白河の法皇の才二
此太子也女院光帝にあらぬ事ありて

世を世に記志の原入る事ありし法皇用ひして
中らうたわとつる事ありし事ありし事ありし
れ共を智の人と保二位のりれきうん事ありし
とかのりし中たれれ思ひなりし月日
を遠らけりたり風の便の由ありし事ありし
あふされけれも山心よりありし事ありし
りし事ありし事ありし大京とよみ山家の
山住者ありし事ありし月日ありし文流
の二心に成りし月日ありし事ありし
けしし事ありし事ありし事ありし事ありし

思ひ立りてふてやい中のまに成たり南面の
極嘆て極とあり何きより出り千豆のいりさめお
り志願のほたいとやきし春をさむるふ春とさし
去るるりて人寂莫たり何事になてり日よひ
勝ハすにしく今やめり也とい心すのとも
此のや去をたた川りんたたふけりと志すも
此ふにさき弁花のやいをもふんふりり色
りと法皇寂光院御幸夜をたてて補陀洛寺
の御幸とて出さふ夕一思にる御幸ふしとや
たる御車に下着を掛てちりをわりの人こりた

くさつら後徳大寺右大臣公の山子内大臣実定
右大臣実隆出雲白花山院大政大臣忠雅治
子大納言忠雅侍従大納言成道山子守忠泰
通三茶田大臣云教山子大納言実雅公御門内大
臣雅通山子守忠通親宗院大納言吉田中
納言忠とせいけり其外右殿上人北面より供
奉に大江山のやりてを過さるる一と信系傳者
父のあゆをともてて三置し補陀洛寺を右の
すまのつゝをさかの山のやりて瀬陵の里大京の
別所守光院へ御幸からぬ月の日よ乃事

かんと文筆の志はみす勝をてけ入る勢をよるす
うら蕎麦苔もさう人かか—寂雲の柴の庵ハ世
人考として人もかき福多たる能をも且と思ひ至ら勢
夕ふりつるれ也遠山にから白雲ハ散り—花のうら
み也^音清きたみゆ材ゆと去の名勢を思ふ池のみね
こを敵覚われ中山鳥の本よのれる花れた—ゆ
青栞いとみいれ若葉にけらる花八重と三葉の
絶るか初きしうした時をあらうはふ巻候つ
侍をくわら木の表の下草志りつわい今りの御事や
侍鳥よまをます—アの匠栞凡ふ志うれぬ山隈ハ

栞ふれありて幽きり乃ありの花のみの面にちりしとく
を四覽しして法皇山ふ、良のうらふ

池あふけの栞教あて波の花より盛也ルリ

西の山のやうしに—さうの草堂あり別荘ヤえ院とか
うれたり又三河入子大江の定基法師の志や、や
うせんの本に伝るる時祿り詩りあり

草庵無人助病起 香爐有火向西眠

竹笙歌遠聞孤雲上 聖魚来迎落日前

とせかかれたる其波よ女院ハ教とそん—うて

かんとすもあす黒漆の杖うれしたるち福の社の手り

又ひとりのある侍子を物けてい後すれは宿所とをわ
くて中へけあふ廿の簀子に安んじたり帷を巻た下ハ
くすひのおと後をさうきてつりたる髪皮引返ておん
たる中へに掛られたる物としておのの衣と紙の字
士を思ふ安んじたりいふ本流とかかりた所と
大和侍女に紙屏風を立て女院の御まじりかく
物やせしけり

おのいたや二山のおまじりわく書おの月もよ
みんよ

東の壁ふやりたる理比理色一面つ三つれたりい
張歌舞の菩薩来迎の伎式を思ふをるると衣

ありうらむを後十く龍歌かとおつせたりす
ある場より供事此人は直衣袖も土着り斗也かの寺
の眺をゆるんやれ山後山河の青巖の形をけつ
てかありれ共やりとらる石と色水後おの人の色きたん
の色を漂されも落るるおの色縁屏風の垣あまの山
後に書とも筆も及くし一照るあ小僧かくして獲
ての乃場すしれ香花を巻あ一されい本尊佛像
うらさむたり荒破て霧やりの香をたす櫃あ
て月光住の灯をかこけ山のおくよ一の草庵
五石女院の可すまめくし小庵室也四方に長山連

りふとマヤ物とて色紙の猿の二匹丸木あり又打の
言はりある事と云れて然腸をひく言はれ也
窓乃中には月影斗於澄すさるかゝる采香の
りまを忍すくまゆんと思ふやうに思はし
くん垣と鶯胡のいひうて新にと朽きやまを
去れふしでのま草やとまの志をいすまの
ととにおとぬれん凱草屢空草歌の花に
まの志も中川とて柴のつみと牛のすれうまいたる
まの志の意もわれをて藜草在深溪雨深寒極
をくろく不れとも云川とて山庵室にらいてる

久て一箇ある山障子をれみく多く昔の蘭麝の香
を引うておき葉とに不つる不め香の煙かり
三尺斗の山身流院来迎の三尊東向とあると
佛のたると善賢の繪像をうけ有り前には八
軸の妙文を置いたりありと善守和尚の山歌
をうけれと浄土の三部経毎のの山石化とあ
なくくて何れはしとてま巻斗にすうれたり
侍ある山棚と浄土の山寺共おれたり又と見
山寺とありとて山雙紙とありありありたり
山障子の法經の要文と紙にうれたり

一切業障海 皆從妄相生 若欲懺悔者 端是實相
若有重業障 無生淨土因 乘除陀願カ 必生安樂國
極重惡人 無他方便 唯稱除陀 得生極樂
法身遍滿諸眾生 客塵煩惱為覆藏
不知我身常如來 流轉生死無止期
このりあり昔らんたう入内の居とて中夜あまの
おしりまゝハ南殿の梅にあひつけ
こたへしれあまの初のハ雲橋より九重に梅しはる哉
方と清涼殿のあ志れと山花のりして
おまのて何やのたをる時をふくや月雨の夕暮

あし初し秋の九重の中にそめるの月を
久方の月のうつろひ秋の枝をまよあれとて増らん
とあまの冬ハ右を馬場の雪を面白とわらんし
侍人のハヤも来るといふせんやまをいたるの雪哉
おとすれし侍のハ其上あまのまをの曲を竹百てあま
いあまの巾衣板をきいて掛られたり尚行念を文
ていよあまの系繋きりて電りもてぬる世の中を何
たましとあまののしとて人やまの人を何と宣ふ
二三座也たれハ老いカ尼一人あまを待やと著下勢
も女院ハいづくよとて山尋何果の上の山ハ花つみ

こゝろ安らぬと云はれは法皇衣に受て先一世を
けられさあつと云ふてつら法皇をさす
小事やかくを侍と仰りけは尼内めと泣き
しをふさ(て)やけり女院の入室お國の山娘既と天
下の國母にておえしやうい小事ハ中しやう及
温院院善観文のたのしみ去の花むゆか
ん父母を色に報り秋の月をやくつる生所の者と
必滅十路ありその小路ゆきは因果經云欲知過
去因見其現在果欲知未來果見其現在因
過此因をさるとおふると其現在の果を見し

おは善因は依て后妃の位を侍信要因は別てか
ら浮目をい説すとと思しゆ教知未來果見
其現在の因おは母より一此蘭麝の匂おの(谷
のあを侍い嵐の花をある難行苦行を供し於身の
をかすは九品往生の蓮花のいある(まんはれ
悉く太子降服其文を出父の王に志のひて檀持山に
あり安らひ難行苦行功に依て是は正まら
難いおは天尊是女院より花をつまふい
世にたむむけは小事ありは(ま)と
法皇此尼のきしれをすのふた(た)ん

物うかとおほしき一光一色道坂の蟬丸のふよのけりあのみけり

世は中へきてりかたてもありぬし一宮のまもはるる

と真に理ありと思ふ所を夢らりの中にも實際の

中へりけりけりおや一表也

朝有紅顔誇世路 夕成白骨朽郊原

年々歳々花相似 歳々年々人不同

と詠られり多しおにたう表也山の山たるの何の柳ふ

志たみ入たる花うみをおれ何れ玉あり何のを

たかりけりせり化たり良久し一かかりて後の山々

大元墨染の衣色より尼二人木の根を傳てをりく

いりふかに立るるら志たみつし一若の花入たる花の

みひちふりけりる建礼門院是也一人の尼は瓜木の藤

くし多り是は太宮大政大臣任通の妹子鳥飼中御

任実今の山姥是也法皇の女院をみのり奉りてを

上へ白をせり女院かくも知りてをりてりるあまを

不とに法皇をえつけ奉り玉ひし

一本正下福寿

十念の柴の樞し 持えの光明を納し

一念の忘の筋し 聖衆の来迎を待つる

思の外に法皇は御事かき奉りたりしとありし

をぬらし西人のたぐはき煙草をいれりて筑前
國大宰府と名にありていひし一六をた夷と
し此等しをい夜ををらせていし一六をた夷と
此住人緒形の子孫惟能一院の正定とて大抵にて
あし十しつ取物りすりてあし一六をた夷と
と王の御業をいおすて、王上を次の業にのまら
せてあし一六をた夷と一六をた夷と公々右上人
さしぬたのおはしり宮崎と中野のあし一六をた
あし一六をたのたぬ遠し一六をた夷とをいりやう
いり一六をた夷と一六をた夷と一六をた夷と

ら福の雲より此月をた夷と一六をた夷と
すた、長初に迷ちり地しそ男女はなす
地獄の罪人い加ると思ふて一六をた夷と
凡人い鬼の海高瀬と名にありていひし一六をた夷と
世のいりてい福の山床無流流秀をた一六をた夷と
床の城小築にていひし一六をた夷と一六をた夷と
高瀬舟といひし一六をた夷と一六をた夷と
てい豊は不押とすりていひし一六をた夷と一六をた夷と
こゑり一六をた夷と一六をた夷と一六をた夷と
いり一六をた夷と一六をた夷と一六をた夷と

小書内大

此子息は清純中納言朝をと源氏か不徳をさし徳西ハ
推能た進出されていつくし小のをももちたつて月
隈かきささやびー夜舟の座の上にはけりて
東西南北を見極しそを衣をうかた世の中いつても
あふき所我細小から魚のそなたはのを人多く
思ひやうんとやて志川より念佛やて波の底より
みれた是をくたすの路にそいー其後さけきの八島
に渡りてあれた民ア大夫成衣りてかーそり由業
化るーそをたあくーそがそ徳ーたる心地して
いー程かあを九帝朝にそ衣落されてハくぬ

滑りて又もたにびれた風をそいひていつ方をいそ
あ共かくいそんれはそ長門國の司美壇浦そ今
ハそ我そそひしゆゆ（入れた二位局ハ先帝をい
地をそ福り袴そそいたくそそそそそ宝釵君のゆ
あれたそそ二位夜の腰にそー神聖をハ服もそ
そそ不ぬ色の衣そらうの川たて船をいふのそそい
うハ先帝あれたそそそそそそそそそそそそそ
ゆられーそ夷兵も山船ハ矢を矢めつそそハ山船
あふ所事かーそそそそそそそそそそそそそそ
入れた先帝の乳母傳典傳大納言典傳以下の女房

身として六夜を以て悦せしむる由りやたよあは
しつと修られけり女院中書少輔入道の世
いひ一とん物事ににたつるとなすくろん故院の
小位の時十五にすて内裏へ参り十六の夕
妃の位より侍りて君王の傍より朝夕と朝政
事をすのりり志代の大官人にかつられ龍
橋鳳窠の九重の内後所錦備にみますとい南
殿の長花清涼殿の木の月をみるあまの上院
御馬の志すくやう身を候しめ志すく
かろ三十三天の雲はく善見城の宮の内も

のくやとけ往生をたのむ聖皇の来迎をすちきこえ
あせまひ高倉の先帝安徳天皇二品大相國を
島内府に至り兄弟骨肉の親族皆居る御もみ
此為かおれをたし涙のたよ志川みくも御逢土
にまられまると難事苦事とてかえりやせし志念
罪消て菩提に縁をたのむらんすいひいひ
と中書少輔といけり漸も善いふありにけれ
入おのこりおと川れと春風のひいた身にし
て御あはれおとらんと云事か供養の人をみれ
志あはれて曉うけて還御ありまはり瀬野里のお

下

下

以

きて来迎院にありし一葉のりかくて
 女院の法皇に還御せしは由りし後の如くはせり
 せしをらうと云をりすいせしをてすんは山
 おしと云るてありし昔の大由山の山柘家出は夢
 につけての由ありせしと指しし免さしけり
 久三年三月十三日に法皇加はれし
 久いぬれありし由りしを承て西海の
 波のうへにたしめて先帝海中に志りし
 百交悉く彼の危ふ入しし今人の心を思
 多しと云ふける罪報にてし事思ふにたり

松の身にありてぬるは其裏の悲し
 此谷檀の浦ありし所の我修成り
 此たり無糧米もつた供侍り
 道の苦たをわし云久し未雪の
 しくく九度三伏の冷天はり
 是すは八寒の八熱といふありし
 乃夢にゆいけあるは所は先帝
 て宗盛以下の公々殿上人
 尋ぬれ龍文城と云ふは此
 三つは草うらうと云ふは
 三つは草うらうと云ふは

つ笑こしつとよきれ則 畜生道也其存はいよ
谷のありをむすい峯の花をつみ佛にたむけし此
人の後生菩提をむすひ朝夕の祈業後て罪
業も後生菩提もあつたはうりいはいんし
たのりしと世受つた一板ありしに御幸にかふとも
うすし事おぼと後られりあすいあすにむぢあ
せふし法皇を治すの事て山僧の人の神を志ならぬ
そあうりし法皇いみじいをおしのおをせしめて
一書め典の山法をたよりち九品のみ又夢うんと也
歎たつきあすいれはれ山林の日すむい寂

莫の境あるに思ひてかくさぬ事あかりり峯
にあつる言をハ七重宝樹しふ世りく山岩間を修
ふ谷ありをハ切徳ありと観しつ春の花秋の月
山はしれんたたくつて西吹風ふおし後をうけぬ
し六十一と申貞應二年の春の此世うすたの雲
のむいをはえつて山僧の春の懐を道出あま
かり一初の中廻向をあらうしはれい山門の人
人も一佛洋土の縁の疑ふころん昔の后地の
後におはしすしと栄耀の心は世むきて内執ん
りおはしすしと源平の逆乱お神をきたす厭

